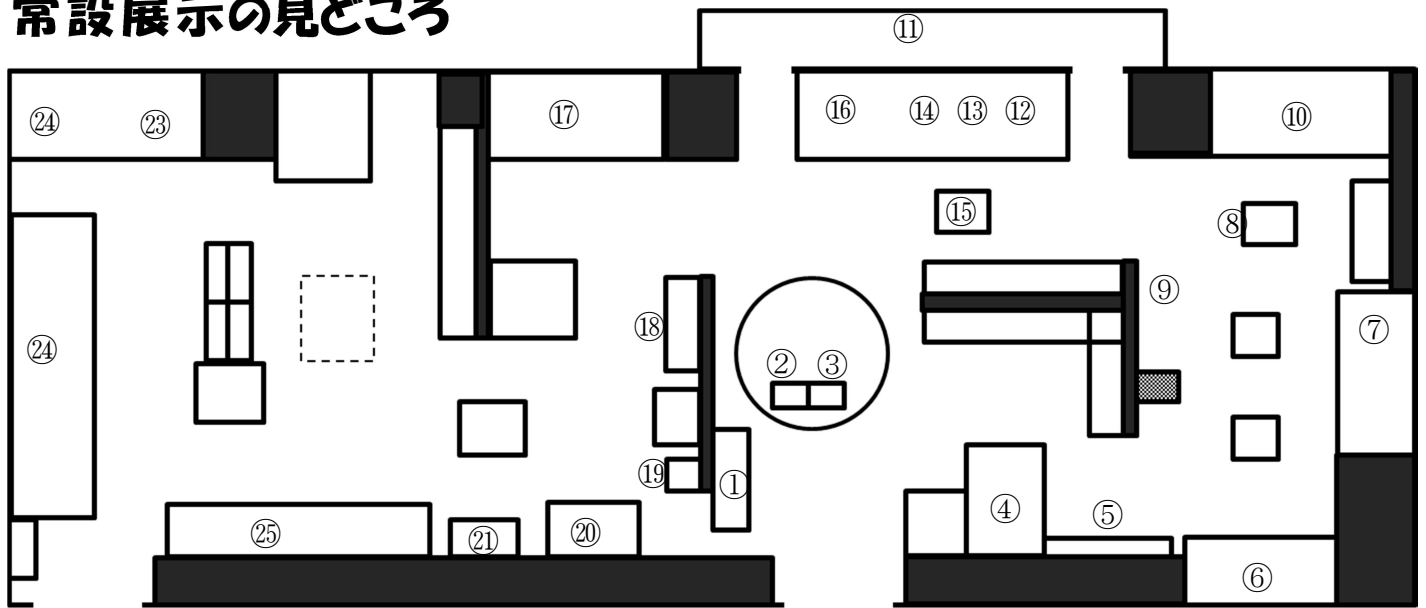
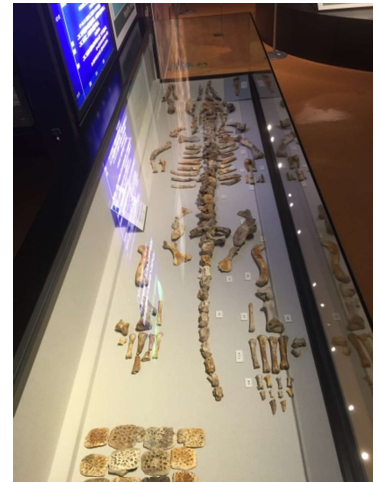


常設展示の見どころ



1 谷下ワニ 数十万年前の大昔にワニがいた！

- 北区引佐町花平谷下の山中で1967年から1973年の浜松北高等学校地学部による発掘調査で計1,000点を超えるワニの化石が採集された。「谷下ワニ」の愛称で親しまれている。個体の識別は困難だったので、大きさや状態を考えて選び、全身骨格を復元した。
- ワニ以外にも多数の淡水(川や湖)魚の化石が見つかっていることから、現在のこのあたりは当時、水辺(川や湖)だったと推定される。



2 ナウマンゾウ 浜松はゾウが歩いていた！

- 西区佐浜町で発見され、骨格標本のもとになった。
- 新種のゾウでドイツ人の地質学者ナウマン博士の名前にちなんで名付けられた。
- これにより、日本は昔ユーラシア大陸と陸続きだったことがわかる。



3 浜北人 本州最古の人骨！

- 浜北区根堅の石灰岩地帯の洞穴から発見された。
- 下層部の人骨は、1万8千年前で「本州最古」のものである。
- 上層部の人骨は、1万4千年前の女性の骨である。骨の大きさから、身長は140cmくらいと推測される。



4 埋葬された縄文人 4000年前の人骨

- 70歳くらいの男性の人骨で、手足を曲げて、土の中に葬られているので「屈葬」といわれている。
- このような形で埋められた理由は、「生まれたときの姿にして土に返すため」「魂が出てきて悪さをしないようにするため」「うずくまって寝る習慣があったから」などの説がある。
- このように、4000年前の人骨が溶けずに、きれいな状態で残っているのは、貝塚のたくさんの貝殻から溶け出す炭酸カルシウムの成分のおかげである。
- この人物は、手に「貝輪」をつけていたため、むらのリーダーだったと考えられている。



5 蜆塚の貝塚 県内最大・市内唯一の縄文時代の貝塚！

- 「貝塚」は、食べた貝や動物の骨、使い終えた道具などが捨てられた場所で、それらの命を送る神聖な場所とも考えられている。およそ 1000年もの間、積み上げられていた。
- 貝殻の大きさを見ると、今よりも大きなものが多く、豊かな食生活を送っていたことがわかる。
- 貝塚からその時代の環境や採れていたものについて知ることができる。
- 貝殻のほかにも捨てられたものがある。
- 「蜆塚」という地名は、ヤマトシジミの貝殻がたくさん見つかったことに由来している。
- 6年生社会科『新しい社会6 歴史編』（東京書籍）P9に掲載されている。



6 石のやじりがささった「シカの骨」 狩りや漁の証拠が見つかる！

- 矢の先につけた「やじり」が、シカの「こしの骨」を貫通している。当時の弓矢の強さが分かる。
- 「やじり」のささっているまわりの骨がもり上がっているため、このシカは、矢を受けつつも致命傷とはならず逃げのびたものと考えられる。



7 米作りの道具、井戸跡 浜松でも弥生時代が始まる！

- 弥生時代前期～中期と考えられる浜松最古の水田跡が、野際遺跡（東区宮竹町）で見つかった。
- 浜松最大の弥生時代集落である伊場遺跡では、三重の塚に囲まれた集落跡や、水田の跡、米作りの道具等が見つかった。
- ケヤキの大木をくり抜いてできた井戸跡が見つかった。市内現存で最古のもの。



8、9 銅鐸 有数の銅鐸発見都市！

- 浜松市は、銅鐸が 25点出土している。
- 最初、銅鐸は音を出す道具として使われていたと考えられ、豊作を願う「お祭り」に使われたと考えられている。しかし、大きくなるにつれ、音を出す道具ではなく、祭りの際に置物として使われたと考えられている。
- 新品のときは、金色に輝いていた。
- 銅鐸は、鋳型を作り、その隙間にとかした銅を流し込んで作った。薄くて精巧なものを作る技術力の高さには驚かされる。



10 木のよろい 日本最古の木のよろい！

- 伊場遺跡から出土したもので、およそ 1800 年前のもの。
- やなぎの木をていねいに彫刻し、赤色の顔料と黒色のうるしが塗られている。
- 日本全国をさがしてみても、これほど精巧な弥生時代のよろいは見つからない。
- この頃から、土地や水利などをめぐって争いがよく行われていたと考えられる。
- このよろいは、うるしが塗られ、さまざまな装飾がされているので、祭りや儀



しき さい つか かんが
式の際に使われたと 考えられている。

11 展望ギャラリーから眺める縄文の森

- 浜松市付近は、桜をはじめとする園芸品種以外は、あまり縄文時代と植生が変わっていないといわれている。蜷塚公園の森には、縄文時代にも存在していた種類の木が生えており、シイやカシなど常緑樹が多いのが特色である。
- 蜷塚遺跡の縄文人たちは、秋にはこの豊かな常緑広葉樹のドングリなどを拾って食べていたと考えられる。



12 銅鏡 画文帯神獣鏡は静岡県指定文化財の鏡！

- 北区引佐町伊谷の馬場平古墳から見つかった「画文帯神獣鏡」。およそ1,600年前のものである。
- 鏡の周りには、帯状に模様がついていて、中には神と神に仕える獣（龍と亀）が交互に描かれている。模様がある方が裏側で、表側はみがき上げられていた。
- 現在はさびて青緑色となっているが、作られたときは、金色に輝いていた。宝物として大切に扱われていた。自分の姿を見るためではなく、神様（太陽など）を映そうとしていた。
- 浜北区内野の赤門上古墳で発見された三角縁神獣鏡は、鏡の縁の断面が三角形になっていることから名づけられている。これと同じ鑄型で作られた銅鏡が、全国各地で発見されている。



13 鉄のかぶと 権力者のシンボル！

- 東区有玉西町の千人塚古墳で見つかった「鉄でできたかぶと」。これ以外にも、大刀や剣、やりなどの戦いの道具が見つかった。これらの鉄でできたものは、権力者しかもつことができなかった。
- この時代では、土地の権力者が強い軍勢力によって人びとの支配を強めていったことが分かる。



14 埴輪 古墳の周りに置かれた埴輪出土！

- 馬具が着けられた馬（飾り馬）と、馬を曳く人を表現した埴輪である。
- 北区都田町の郷ヶ平3号墳から見つかったもので、およそ1,500年前のもの。
- 豪族（権力者）の大きなお墓で、浜松市内では三方原台地の東縁部や都田周辺にたくさん造られた。浜松市内では、1,700基もの古墳が確認されている。
- 古墳の上には、円筒埴輪や、家や動物、人物などをかたどった形象埴輪が配置されていた。



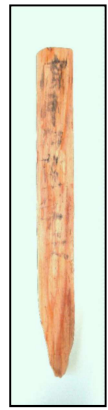
15 金銀装大刀 今でも光り輝く金装！

- 令和2年3月に県の指定文化財になった。
- 中区森田町の鳥居松遺跡で見つかった。
- 6世紀ごろ、朝鮮半島で作られ日本に伝えられたものと見られている。つかの上部は金装。その下部の銀は黒く変色している。刀身は鉄製である。



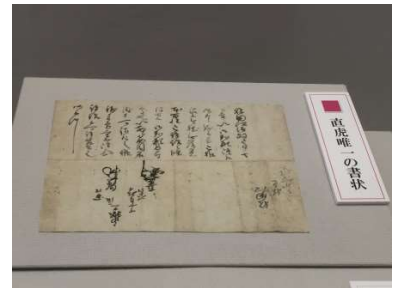
16 **木簡** **浜松最古の文字！**

- 木の板に文字を書き込んだものを「木簡」という。
- 伊場遺跡から出土した木簡には、税として納められた布につけられたものや、帳簿として使われたものがある。
- 木簡のよいところは、使用後に表面をけずれば何度でも利用できることである。
- 1,300年前の文字を読むことができ、当時の地名や人名が残る貴重な資料である。
- 浜松の地名のもとであると考えられている「濱津」（はままつ）という文字が見えているものがある。



17 **鰐口、直虎書状** **湖北の雄 井伊氏のルーツを探る！**

- 鰐口（市指定文化財）は、文永8年（1528年）井伊直隆が井伊八幡宮に奉納したものだ。直隆は、系譜図にはないが、直虎の祖父の直宗であるという説もある。
- 直虎唯一の現存する書状である「井伊直虎・関口氏経連書状（複製、原品は市指定文化財）」は、直虎らが祝田の神官と本百姓へ徳政令の発動を伝えたものである。（蜂前神社所蔵）
- 徳川十六将図 向かって左列前（家康に近い方）から、四天王のうちの3人 酒井忠次・井伊直政・本多忠勝。右列前から松平忠康と、四天王の1人 榊原康政。



18、19 **かわらけ 他** **人々の往来がさかんだった浜松の宿！**

- 鎌倉～戦国時代にかけてのかわらけ（皿）
- 今川氏が遠江を支配したとき、配下の飯尾氏を引馬城に配し、頭陀寺に飯尾氏配下の松下氏がいた。その居館跡からたくさんかわらけが出土した。頭陀寺の鰐口は、鎌倉時代のもので、松下氏館と時期が異なる。鰐口は仏堂の正面につけて鳴らす音具。）
- 松下氏には、織田信長につかえる前の豊臣秀吉が奉公したという言い伝えがある。
- 「飯尾乗連判物」は、宇布見領家の百姓にかけくりや役を課すことを禁じたもの。（市指定文化財）



20 **徳川家康自筆の金子請取覚書**

- 徳川家康が遠江・駿河・三河・甲斐・信濃5カ国を領有していた時代の自筆の文書。
- 家康から、甲斐の国の家臣、日下部定好・成瀬正一に渡された金子請取覚書。
- 押印の壺型の印は、家康の文書中、2番目に古いものである。



21 **各種小判展示** **江戸時代のお金を見るなら、ここ！（静岡銀行より寄贈）**

- 徳川家康は、1601年に金貨・銀貨・銭貨からなる貨幣制度を作った。
- 金は1両=4分=16朱と決まっていたが、銀は重さにより価値が決まっていた。江戸は金、大坂は銀が主に使われていたため、金と銀の価値を決めて取引する両替商がいた。
- 小判1両の価値は、お米をもとに計算すると、小判1両=米1石（約150kg）なので、約63,000円くらい。



22 遠州報国隊 明治維新の重要な役割を担った人々！

- 江戸時代末期から明治初期の戊辰戦争のとき、神職が中心となって官軍に協力した有志隊の一つ。その隊員が着用した陣笠と陣羽織。
- 遠州報国隊は、大総督宮の有栖川宮熾仁親王の護衛をして江戸に行き、その後、上野での彰義隊との戦いに参加した。
- 明治元年に解散命令が出されたとき、東京に残った隊員の中には、招魂社（現在の靖国神社）の創立に尽力した人物や二代目宮司となった人物がいる。



23 太平洋戦争の遺物 空襲で大きな被害を受けた浜松

- 明治以降、浜松に軍隊が配備されていった。昭和12年には三方原飛行場が設置され、40以上の部隊が配置された。太平洋戦争時には、数多くの軍需工場や国鉄浜松工場が置かれ、軍事都市となった。このため、空襲や艦砲射撃の標的となった。
- 東京や名古屋の空襲ルートの途中にあったため、東京や名古屋の空襲の後、残った爆弾を捨てていくように命令が出されていた。
- 昭和19年（1944）12月以降、浜松は27回の空襲が行われた。



24 昔の道具展示 子ども時代に見かけた道具があるかも！

- 右側が70～130年くらい前、左側が40～70年ほど前のもの。日常生活で使われていた道具を展示している。



25 N. YAMAHA アップライトピアノR型14号

浜松のピアノ製作の歴史を物語る1台

- 日本楽器製造株式会社の創設者 山葉寅楠の弟子で養子でもある山葉直吉が設立した山葉ピアノ研究所によって作られた。
- 直吉が弟子の大橋幡岩らとともに、自らが納得できるピアノづくりをめざして製作されたものが「N. YAMAHA」。
- 展示品は、昭和4年の第1号から昭和7年の第34号まで製作されたうちの14番目のもの。
- 発売当初の価格は、1,250円（ヤマハピアノは550円）。
- ドイツ人技師シュレーゲルからも賞賛されるほど高い品質を誇り、作る先から買い手がつくほどだった。

